

**WS6-03****ギラン・バレー症候群における抗糖脂質抗体産生に関連する潜在因子の探索型因子分析による同定**

尾村 誠一<sup>1)</sup>、清水 和秋<sup>2)</sup>、桑原 基<sup>3)</sup>、森川 みゆき<sup>3)</sup>、藤田 貢<sup>1)</sup>、朴 雅美<sup>1)</sup>、佐藤 文孝<sup>1)</sup>、Pedio Erika<sup>4)</sup>、楠 進<sup>3)</sup>、角田 郁生<sup>1)</sup>

近畿大学 医学部 微生物学講座<sup>1)</sup>、関西大学 社会学部 社会学科 心理学専攻<sup>2)</sup>、近畿大学 医学部 内科学講座 神経内科部門<sup>3)</sup>、バーリ大学 医学部<sup>4)</sup>

ギラン・バレー症候群（GBS）は末梢神経系（PNS）の急性免疫性神経疾患であり、その臨床症状には自己に反応する抗糖脂質抗体の関与が示唆されている。抗糖脂質抗体産生には微生物と PNS 抗原との間の分子相同意性の寄与が示唆されている。探索型因子分析（EFA）は観測データ中に存在する潜在因子（とその数）を特定する強力な統計ツールとして心理学領域で頻用されている。医学領域でも疾患に関連する潜在因子や原因の特定に応用可能と考えられるが、ほとんど活用されていない。そこで我々は、抗糖脂質自己抗体産生と潜在因子が EFA により関連付けられると仮説を立てた。10 種の糖脂質とそのうちの 2 種の組み合わせによる 45 種の複合体に対する血清抗体価を、100 人の GBS 患者に対してグリコアレイで定量した。得られたデータを用いて因子数決定には平行分析、因子抽出には最尤法、因子回転にはジェオミン回転を使用して EFA を行った。その結果、異なる抗体群で構成された 5 つの因子が同定され、標的抗原は PNS の特定部位に局在した。因子 1 は LM1、ガラクトセレブロシド、asialo-GM1（主にミエリン抗原）、因子 2 は GQ1b、GM2、GD1a およびその複合体（GQ1b は脳神経 III、IV、VI の傍絞輪部ミエリン抗原）、因子 3 は GM1 とその複合体（軸索膜抗原）、因子 4 は GD1b を含む複合体（末梢神経傍絞輪部ミエリン・後根神経節細胞抗原）、因子 5 は GalNAc-GD1a とその複合体（傍絞輪部軸索膜抗原）で構成された。本研究は、EFA により GBS における特定 PNS 標的抗原に対する自己抗体群誘導への限られた数の潜在因子の関与が示唆された初めての研究である。

**WS6-04****POEMS 症候群に対するレナリドミド・デキサメタゾン療法：20 例の検討**

水地 智基、三澤 園子、関口 縁、澁谷 和幹、網野 寛、常山 篤子、鈴木 陽一、中村 圭吾、桑原 聰  
千葉大学 大学院医学研究院 神経内科学

**【背景】** POEMS 症候群に対するレナリドミド・デキサメタゾン (RD) 療法の有効性は、臨床試験やケースシリーズで複数報告されている。しかし、本邦からの報告は少数に限られる。**【目的】** 本邦における、POEMS 症候群に対する RD 療法の有効性及び安全性を、多数例の検討により明らかにする。**【方法】** 当施設で RD 療法を受けた、POEMS 症候群の連続症例を対象とした。前向きに実施した自主臨床試験の 5 例は除外した。RD 療法は 1 サイクル 28 日間で構成され、レナリドミド 25 mg を第 1～21 日目に経口投与、デキサメタゾン 20 mg を週 1 回経口投与する（忍容性・有効性によりレナリドミド及びデキサメタゾンの減量・中止を適宜考慮する）。後ろ向きカルテ調査により、有効性（血清 VEGF 減少率、臨床症状の改善、無増悪生存期間）及び安全性（有害事象）について検討した。**【結果】** 20 例が対象となった（うち再発難治 19 例、年齢中央値 58 歳）。RD 療法を継続した期間の中央値は 4 サイクル（範囲、1-33 サイクル）であった。治療前後での血清 VEGF 減少率は 38.3% (SD 58.7) で、13 例 (65%) において血清 VEGF の正常化 (1,000 pg/ml 未満) を達成した。11 例 (55%) で浮腫、皮膚変化、ニューロパチー等の臨床症状の改善が得られた。無増悪生存期間の中央値は 34 か月であった。8 例 (40%) において、血球減少や薬疹の発現により治療中止に至った。**【考察】** 比較的短期間の RD 療法により血清 VEGF 値が減少し、約半数例で臨床症状の改善が得られた。しかし、既報告と比較すると本研究の治療成績はやや劣る。その理由として、対象患者に難治例が多いこと、有害事象により十分に治療が継続出来なかった症例が含まれること等が考えられる。また、初発例に対する検討が今後の重要課題である。**【結論】** RD 療法は再発難治の POEMS 症候群であっても有効な可能性がある。しかし、血球減少等の有害事象に、十分留意する必要がある。

ISSN 0918-936X

# Neuroimmunology

神経免疫学

第30回  
日本神経免疫学会学術集会  
抄録集

会長／藤原 一男

2018・郡山

VOL.23 NO.1 2018

Official Journal of Japanese Society for Neuroimmunology

日本神経免疫学会機関紙